

浮世絵

江戸庶民の生活芸術からヨーロッパの新しい文化へ

西暦	和暦	日本の出来事	浮世絵と日本画																																																
1600	慶長	江戸幕府 (1604)	<p>浮世絵は日本独特の生活芸術</p> <p>ヨーロッパなどの芸術至上主義の絵画では、そのモチーフは肖像画や宗教に関連したものが多いのですが、浮世絵は江戸時代に江戸の庶民のために描かれ、モチーフも自然の風物詩や当時の庶民の流行などもある日本独特の絵画です。幕末から明治時代にはヨーロッパに渡りました。当時のヨーロッパの人々は浮世絵などの江戸の美術品を見て、日本人は上質の生活をしているのだからとあこがれました。そして描かれている精神文化やモチーフ、技法などが伝わり、ジャポニスムという大きな文化の流れを生み出しました。絵画では印象派の画家によって新たな絵画となりました。また、日本の工芸品とともにデザインとなってアールヌーボーなどの様式になり一般市民の生活の中にも入っていきました。明治維新以後、西洋の見方で江戸時代のことが教育されています。浮世絵には絵とともに文字を配し、江戸当時の人々の生活や思想が描かれていますので江戸の本当の姿を知るには有力な資料です。</p> <p>浮世絵の歴史</p> <p>1603年に江戸に徳川幕府が開かれ、80年後の1681年には浮世絵という言葉が見られます。「浮世」という言葉には当時の庶民のために書かれた小説「浮世草子」というように、当時の仏教思想による浄土（理想世界）に対し、現世を「浮世」ともいい、当時の江戸の最新流行のことが描かれた絵という意味合いで「浮世絵」との説もあります。江戸では「錦絵」、地方の人からは「江戸絵」ともいわれました。また、江戸後期に大阪方面で描かれたものは「上方絵」といいます。明治期にはいと、化学染料により色が変化してゆきます。また、文明開化といった時代の変化のなかで衰退してゆきます。</p> <p>浮世絵には絵師が直接描いた「肉筆浮世絵」と、「版元」と呼ばれる出版業者に抱えられている「彫師」によって木の板に彫られ、「摺師」によってすられた「浮世絵版画」があります。この「浮世絵版画」を版元の店先で売る形態が大きく発展していきます。</p>																																																
	元和																																																		
	寛永																																																		
	正保																																																		
	慶安																																																		
1650	承応	元禄赤穂事件 (1703)	<p>浮世絵の描く世界</p> <p>美人画・・・浮世絵以前にも庶民生活を描く屏風絵などに女性が描かれていましたが、切手の図柄で有名な「見返り美人」の菱川師宣以降 横月堂安度、鈴木春信、鳥居清長、鳥文斎栄之、喜多川歌麿など多くの絵師が女性を美しく描くために工夫して、独特の美人像を生みだしています。また、東洲斎写楽以後は歌川派では歌川豊広や初代歌川豊国なども美人画をてがけていますが、横斎英泉が独特の美人画を残しています。美人画は明治に入ると日本画や創作版画の中に組み込まれていきます。浮世絵派には伊東深水、新版画派には竹久夢二などがいます。</p> <p>役者絵・歌舞伎・相撲絵・・・1603年に出雲阿国によって始められた歌舞伎踊りは、浮世絵以前から屏風絵などに取り上げられました。浮世絵の初期においても、鳥居清信が役者を奥村政信が芝居小屋を描いていますが、東洲斎写楽が描く写実的な役者絵に人気がでると、役者絵が多く描かれるようになりました。特に、江戸後期主流となった歌川派の絵師たちも役者絵を描いています。特に三代歌川豊国が最、人気も秀でています。「相撲絵」は相撲の力士を描いた絵です。芝居とともに人気がありました。</p> <p>風景画・自然・・・浮世絵には四季折々の風物詩が描かれています。名所絵は浮世絵以前からあったモチーフです。単なる風景画ではなく行楽地や有名な社寺などいわゆる名所です。浮世絵の風景画では名所絵が多く描かれています。葛飾北斎や歌川広重など描いています。また、花鳥風月をモチーフとすることは浮世絵以外の分野でも見られます。葛飾北斎の花鳥風月などがあります。</p> <p>文学・歴史・伝説など・・・日本や中国の歴史上の武将などを描いた「武者絵」があります。「武者絵」の題材としては、「五条橋における義経と弁慶」など説話・伝説によるもの、幕末に人気があった「水戸黄門」のよびや中国の文学をモチーフにしたものがあります。また、幕府の方針で安土・桃山時代以降の事柄を描くことは禁止されていたので、その時代の物語などは鎌倉時代などに置き換えて描いたりしました。三代歌川豊国が編み出した「源氏絵」は紫式部の源氏物語をモチーフにしていますが、室町時代の設定になっています。</p> <p>戯画・風刺画・・・滑稽や風刺を目的とした戯画では歌川国芳の「金魚づくし」のように身近な生き物を擬人化したものや、形態遊びのような絵もあります。また、関係の無い絵柄や文字を組み合わせて暗号解読のように答えを導かせる「判じ絵」となっているものもあります。社会・ニュースなど・・・天変地異、社会の出来事などのニュースを描いたもの、江戸期には安政の地震の時の「鯉絵」、有名な人が死没したときの「死絵」などがありますが、幕末から明治にかけての文明開化の様子を報道した「横俵絵」「開化絵」「新聞絵」などがあります。</p> <p>その他・・・子供むきの錦絵は「おもち絵」があります。その中でも双六は明治期まで作られました。実用品に近いものとして、うちわに張るうちは絵・地図・封筒絵 などがありました。広告用チラシとしての「広告絵」鳥居清信の時代からあります。</p>																																																
	寛文																																																		
	延宝																																																		
	天和																																																		
	貞享																																																		
1700	元禄	人形浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」(1748)	<p>浮世絵版画ができるまで</p> <ol style="list-style-type: none">1) 版元（出版者）どの絵師になにを描かせるか企画します。幕府の検閲に作品を提出する責任者でもあり、販売、広告をおこないます2) 絵師は原面を描きます。これを「版下」といいます。版下は墨一色で描き、版元に出します。3) 彫師は版下を版木にはり彫ってゆきます。細かな所は彫師が決めます。彫り終わると墨摺りをつくり絵師に戻します。4) 絵師は版下の墨摺りに色の指定をします。5) 彫師は色の数によって色板を用意し、摺り起こします。6) 摺師は出来上がった色板を順に刷り上げて完成させ、版元や絵師に確認を求めて量産します。ぼかし(グラデュエーション)なども摺師の仕事です。 <p>版型と用紙</p> <p>浮世絵版画に使う紙の条件としては、特に多色刷りの錦絵には繊維が長く、耐久性があり、柔らかく、絵具の吸収がよく、表面の滑らかな紙が適しています。初期のころには美濃紙や仙花紙などが使われましたが、錦絵の頃には奉書紙が使われました。版型（大きさ）も同じ呼び方でも使われる紙によってまちまちですが、錦絵の頃には大奉書（39cm×53cm）小奉書（約33cm×約47cm）が使われ、大奉書の半分大きさを「大判」、その半分の「中判」といいました。小奉書の半分は「間版（あいばん）」、その半分の「小判」といいます。</p> <p>絵具と顔料</p> <p>江戸時代の顔料は植物や鉱物を原料としたものが多く、</p> <table border="1"><tr><td>色</td><td>原料</td></tr><tr><td>紅</td><td>紅花</td></tr><tr><td>黄</td><td>ワコン草 海棠（すみ）の木 雌黄（しおう）の木 石黄<硫化砒素></td></tr><tr><td>藍</td><td>藍 露草</td></tr><tr><td>朱</td><td>水銀<酸化水銀> 紅殻（べんがら）<酸化第二鉄> 丹<酸化鉛></td></tr><tr><td>白</td><td>胡粉（蛤の貝殻）<炭酸カルシウム> 墨</td></tr></table> <p>などですが、1829年から舶来の化学染料が使われました。ペロロ、ムラコ（紫）、ローダミン（桃色）などで明治期にはアニリン赤のような染料がつかわれケバケバしい色使いとなります。</p>	色	原料	紅	紅花	黄	ワコン草 海棠（すみ）の木 雌黄（しおう）の木 石黄<硫化砒素>	藍	藍 露草	朱	水銀<酸化水銀> 紅殻（べんがら）<酸化第二鉄> 丹<酸化鉛>	白	胡粉（蛤の貝殻）<炭酸カルシウム> 墨																																				
	色			原料																																															
	紅			紅花																																															
	黄			ワコン草 海棠（すみ）の木 雌黄（しおう）の木 石黄<硫化砒素>																																															
	藍			藍 露草																																															
朱	水銀<酸化水銀> 紅殻（べんがら）<酸化第二鉄> 丹<酸化鉛>																																																		
白	胡粉（蛤の貝殻）<炭酸カルシウム> 墨																																																		
宝永																																																			
正徳																																																			
享保																																																			
元文																																																			
1750	寛保	北斎漫画 (1814)	<p>浮世絵の形式</p> <p>浮世絵の中には様々な印があります。</p> <p>落款（らっかん） 絵師の名前です。号と名があります。号などで年代がわかることもあります。</p> <p>版元印など 版元の印が版元印です。摺師や彫師の印もあります。</p> <p>改印（あらためいん） 幕府の検閲印です。時代によっては極印（きわめいん）とも呼ばれました。検閲は版元の仲間うちで行事という当番を出して行った時期や、町役人が行った時期などあります。検閲を行う役を名主といいますが、改印は「極」か「改」の文字や「名主の印」「年月」などで構成されています。</p>																																																
	延享																																																		
	寛延																																																		
	宝暦																																																		
	明和																																																		
1800	安永	歌川広重「江戸名所百景」(1856)	<p>年代と改印の様式</p> <table border="1"><thead><tr><th>和暦</th><th>西暦</th><th>改印</th><th>和暦</th><th>西暦</th><th>改印</th></tr></thead><tbody><tr><td>第一期 極印の時代</td><td>寛政3年 ~ 文化元年 (1791~1804)</td><td>「極印」単独</td><td>第五期 改印と年月印の時代</td><td>文化2年 ~ 文化7年 (1805~1810)</td><td>「極印」と「年月印」</td></tr><tr><td>第二期 名主印1つの時代</td><td>天保14年~弘化4年 (1843~1847)</td><td>「名主印」単独</td><td>第六期 年月印の時代</td><td>文化8年 ~ 文化11年 (1811~1814)</td><td>「極印」と「行事印」</td></tr><tr><td>第三期 名主印2つの時代</td><td>弘化4年 ~ 嘉永5年 (1847~1852)</td><td>「名主印」2つ</td><td>文化12年~天保13年 (1815~1842)</td><td>「極印」単独</td><td></td></tr><tr><td>第四期 名主印2つと年月印の時代</td><td>嘉永5年2月~嘉永6年11月 (1852~1853)</td><td>「名主印」2つと「年月印」</td><td>第七期 年月改三文字一印の時代</td><td>天保14年~天保13年 (1843~1847)</td><td>「名主印」単独</td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td>第八期 年月二文字一印の時代</td><td>安政5年 (1858)</td><td>「年月印」単独</td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td>安政6年 ~ 明治4年 (1859~1871)</td><td>「年月改印」単独</td></tr><tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td>明治5年 ~ 明治8年 (1872~1875)</td><td>「年月印」単独</td></tr></tbody></table>	和暦	西暦	改印	和暦	西暦	改印	第一期 極印の時代	寛政3年 ~ 文化元年 (1791~1804)	「極印」単独	第五期 改印と年月印の時代	文化2年 ~ 文化7年 (1805~1810)	「極印」と「年月印」	第二期 名主印1つの時代	天保14年~弘化4年 (1843~1847)	「名主印」単独	第六期 年月印の時代	文化8年 ~ 文化11年 (1811~1814)	「極印」と「行事印」	第三期 名主印2つの時代	弘化4年 ~ 嘉永5年 (1847~1852)	「名主印」2つ	文化12年~天保13年 (1815~1842)	「極印」単独		第四期 名主印2つと年月印の時代	嘉永5年2月~嘉永6年11月 (1852~1853)	「名主印」2つと「年月印」	第七期 年月改三文字一印の時代	天保14年~天保13年 (1843~1847)	「名主印」単独				第八期 年月二文字一印の時代	安政5年 (1858)	「年月印」単独					安政6年 ~ 明治4年 (1859~1871)	「年月改印」単独					明治5年 ~ 明治8年 (1872~1875)	「年月印」単独
	和暦			西暦	改印	和暦	西暦	改印																																											
	第一期 極印の時代			寛政3年 ~ 文化元年 (1791~1804)	「極印」単独	第五期 改印と年月印の時代	文化2年 ~ 文化7年 (1805~1810)	「極印」と「年月印」																																											
	第二期 名主印1つの時代			天保14年~弘化4年 (1843~1847)	「名主印」単独	第六期 年月印の時代	文化8年 ~ 文化11年 (1811~1814)	「極印」と「行事印」																																											
	第三期 名主印2つの時代			弘化4年 ~ 嘉永5年 (1847~1852)	「名主印」2つ	文化12年~天保13年 (1815~1842)	「極印」単独																																												
第四期 名主印2つと年月印の時代	嘉永5年2月~嘉永6年11月 (1852~1853)	「名主印」2つと「年月印」	第七期 年月改三文字一印の時代	天保14年~天保13年 (1843~1847)	「名主印」単独																																														
			第八期 年月二文字一印の時代	安政5年 (1858)	「年月印」単独																																														
				安政6年 ~ 明治4年 (1859~1871)	「年月改印」単独																																														
				明治5年 ~ 明治8年 (1872~1875)	「年月印」単独																																														
天明																																																			
寛政																																																			
享和																																																			
文化																																																			
1850	文政	歌川広重「富嶽百景」(1834)	<p>浮世絵版画ができるまで</p> <ol style="list-style-type: none">1) 版元（出版者）どの絵師になにを描かせるか企画します。幕府の検閲に作品を提出する責任者でもあり、販売、広告をおこないます2) 絵師は原面を描きます。これを「版下」といいます。版下は墨一色で描き、版元に出します。3) 彫師は版下を版木にはり彫ってゆきます。細かな所は彫師が決めます。彫り終わると墨摺りをつくり絵師に戻します。4) 絵師は版下の墨摺りに色の指定をします。5) 彫師は色の数によって色板を用意し、摺り起こします。6) 摺師は出来上がった色板を順に刷り上げて完成させ、版元や絵師に確認を求めて量産します。ぼかし(グラデュエーション)なども摺師の仕事です。 <p>版型と用紙</p> <p>浮世絵版画に使う紙の条件としては、特に多色刷りの錦絵には繊維が長く、耐久性があり、柔らかく、絵具の吸収がよく、表面の滑らかな紙が適しています。初期のころには美濃紙や仙花紙などが使われましたが、錦絵の頃には奉書紙が使われました。版型（大きさ）も同じ呼び方でも使われる紙によってまちまちですが、錦絵の頃には大奉書（39cm×53cm）小奉書（約33cm×約47cm）が使われ、大奉書の半分大きさを「大判」、その半分の「中判」といいました。小奉書の半分は「間版（あいばん）」、その半分の「小判」といいます。</p> <p>絵具と顔料</p> <p>江戸時代の顔料は植物や鉱物を原料としたものが多く、</p> <table border="1"><tr><td>色</td><td>原料</td></tr><tr><td>紅</td><td>紅花</td></tr><tr><td>黄</td><td>ワコン草 海棠（すみ）の木 雌黄（しおう）の木 石黄<硫化砒素></td></tr><tr><td>藍</td><td>藍 露草</td></tr><tr><td>朱</td><td>水銀<酸化水銀> 紅殻（べんがら）<酸化第二鉄> 丹<酸化鉛></td></tr><tr><td>白</td><td>胡粉（蛤の貝殻）<炭酸カルシウム> 墨</td></tr></table> <p>などですが、1829年から舶来の化学染料が使われました。ペロロ、ムラコ（紫）、ローダミン（桃色）などで明治期にはアニリン赤のような染料がつかわれケバケバしい色使いとなります。</p>	色	原料	紅	紅花	黄	ワコン草 海棠（すみ）の木 雌黄（しおう）の木 石黄<硫化砒素>	藍	藍 露草	朱	水銀<酸化水銀> 紅殻（べんがら）<酸化第二鉄> 丹<酸化鉛>	白	胡粉（蛤の貝殻）<炭酸カルシウム> 墨																																				
	色			原料																																															
	紅			紅花																																															
	黄			ワコン草 海棠（すみ）の木 雌黄（しおう）の木 石黄<硫化砒素>																																															
	藍			藍 露草																																															
朱	水銀<酸化水銀> 紅殻（べんがら）<酸化第二鉄> 丹<酸化鉛>																																																		
白	胡粉（蛤の貝殻）<炭酸カルシウム> 墨																																																		
天保																																																			
弘化																																																			
嘉永																																																			
安政																																																			
1900	文久	明治維新 (1868)	<p>浮世絵版画ができるまで</p> <ol style="list-style-type: none">1) 版元（出版者）どの絵師になにを描かせるか企画します。幕府の検閲に作品を提出する責任者でもあり、販売、広告をおこないます2) 絵師は原面を描きます。これを「版下」といいます。版下は墨一色で描き、版元に出します。3) 彫師は版下を版木にはり彫ってゆきます。細かな所は彫師が決めます。彫り終わると墨摺りをつくり絵師に戻します。4) 絵師は版下の墨摺りに色の指定をします。5) 彫師は色の数によって色板を用意し、摺り起こします。6) 摺師は出来上がった色板を順に刷り上げて完成させ、版元や絵師に確認を求めて量産します。ぼかし(グラデュエーション)なども摺師の仕事です。 <p>版型と用紙</p> <p>浮世絵版画に使う紙の条件としては、特に多色刷りの錦絵には繊維が長く、耐久性があり、柔らかく、絵具の吸収がよく、表面の滑らかな紙が適しています。初期のころには美濃紙や仙花紙などが使われましたが、錦絵の頃には奉書紙が使われました。版型（大きさ）も同じ呼び方でも使われる紙によってまちまちですが、錦絵の頃には大奉書（39cm×53cm）小奉書（約33cm×約47cm）が使われ、大奉書の半分大きさを「大判」、その半分の「中判」といいました。小奉書の半分は「間版（あいばん）」、その半分の「小判」といいます。</p> <p>絵具と顔料</p> <p>江戸時代の顔料は植物や鉱物を原料としたものが多く、</p> <table border="1"><tr><td>色</td><td>原料</td></tr><tr><td>紅</td><td>紅花</td></tr><tr><td>黄</td><td>ワコン草 海棠（すみ）の木 雌黄（しおう）の木 石黄<硫化砒素></td></tr><tr><td>藍</td><td>藍 露草</td></tr><tr><td>朱</td><td>水銀<酸化水銀> 紅殻（べんがら）<酸化第二鉄> 丹<酸化鉛></td></tr><tr><td>白</td><td>胡粉（蛤の貝殻）<炭酸カルシウム> 墨</td></tr></table> <p>などですが、1829年から舶来の化学染料が使われました。ペロロ、ムラコ（紫）、ローダミン（桃色）などで明治期にはアニリン赤のような染料がつかわれケバケバしい色使いとなります。</p>	色	原料	紅	紅花	黄	ワコン草 海棠（すみ）の木 雌黄（しおう）の木 石黄<硫化砒素>	藍	藍 露草	朱	水銀<酸化水銀> 紅殻（べんがら）<酸化第二鉄> 丹<酸化鉛>	白	胡粉（蛤の貝殻）<炭酸カルシウム> 墨																																				
	色			原料																																															
	紅			紅花																																															
	黄			ワコン草 海棠（すみ）の木 雌黄（しおう）の木 石黄<硫化砒素>																																															
	藍			藍 露草																																															
朱	水銀<酸化水銀> 紅殻（べんがら）<酸化第二鉄> 丹<酸化鉛>																																																		
白	胡粉（蛤の貝殻）<炭酸カルシウム> 墨																																																		
慶応																																																			
明治																																																			
大正																																																			
昭和																																																			
1950	昭和	第一次世界大戦 (1914)	<p>浮世絵版画ができるまで</p> <ol style="list-style-type: none">1) 版元（出版者）どの絵師になにを描かせるか企画します。幕府の検閲に作品を提出する責任者でもあり、販売、広告をおこないます2) 絵師は原面を描きます。これを「版下」といいます。版下は墨一色で描き、版元に出します。3) 彫師は版下を版木にはり彫ってゆきます。細かな所は彫師が決めます。彫り終わると墨摺りをつくり絵師に戻します。4) 絵師は版下の墨摺りに色の指定をします。5) 彫師は色の数によって色板を用意し、摺り起こします。6) 摺師は出来上がった色板を順に刷り上げて完成させ、版元や絵師に確認を求めて量産します。ぼかし(グラデュエーション)なども摺師の仕事です。 <p>版型と用紙</p> <p>浮世絵版画に使う紙の条件としては、特に多色刷りの錦絵には繊維が長く、耐久性があり、柔らかく、絵具の吸収がよく、表面の滑らかな紙が適しています。初期のころには美濃紙や仙花紙などが使われましたが、錦絵の頃には奉書紙が使われました。版型（大きさ）も同じ呼び方でも使われる紙によってまちまちですが、錦絵の頃には大奉書（39cm×53cm）小奉書（約33cm×約47cm）が使われ、大奉書の半分大きさを「大判」、その半分の「中判」といいました。小奉書の半分は「間版（あいばん）」、その半分の「小判」といいます。</p> <p>絵具と顔料</p> <p>江戸時代の顔料は植物や鉱物を原料としたものが多く、</p> <table border="1"><tr><td>色</td><td>原料</td></tr><tr><td>紅</td><td>紅花</td></tr><tr><td>黄</td><td>ワコン草 海棠（すみ）の木 雌黄（しおう）の木 石黄<硫化砒素></td></tr><tr><td>藍</td><td>藍 露草</td></tr><tr><td>朱</td><td>水銀<酸化水銀> 紅殻（べんがら）<酸化第二鉄> 丹<酸化鉛></td></tr><tr><td>白</td><td>胡粉（蛤の貝殻）<炭酸カルシウム> 墨</td></tr></table> <p>などですが、1829年から舶来の化学染料が使われました。ペロロ、ムラコ（紫）、ローダミン（桃色）などで明治期にはアニリン赤のような染料がつかわれケバケバしい色使いとなります。</p>	色	原料	紅	紅花	黄	ワコン草 海棠（すみ）の木 雌黄（しおう）の木 石黄<硫化砒素>	藍	藍 露草	朱	水銀<酸化水銀> 紅殻（べんがら）<酸化第二鉄> 丹<酸化鉛>	白	胡粉（蛤の貝殻）<炭酸カルシウム> 墨																																				
	色			原料																																															
紅	紅花																																																		
黄	ワコン草 海棠（すみ）の木 雌黄（しおう）の木 石黄<硫化砒素>																																																		
藍	藍 露草																																																		
朱	水銀<酸化水銀> 紅殻（べんがら）<酸化第二鉄> 丹<酸化鉛>																																																		
白	胡粉（蛤の貝殻）<炭酸カルシウム> 墨																																																		
平成																																																			